

## 平成20年度共同利用研究・研究成果報告書

研究課題名	和文：南極隕石の <sup>26</sup> Al放射能の測定 英文：Determination of <sup>26</sup> Al radioactivity in Antarctic meteorite samples
研究代表者	立正大学地球環境科学部・教授・福岡孝昭
参加研究者	国立極地研究所・教授・小島秀康 東京海洋大学・教授・大橋英雄 東京大学工学部・准教授・松崎浩之 立正大学地球環境科学部・院生・楠野葉瑠香
研究成果概要	<p>「南極隕石はいつ落下したか？」</p> <p>南極の氷河の上で多数の隕石が発見され、今までに日本隊によって約1.6万個もの隕石が収集されています。南極の氷は約72万年の年代にわたっているため、これら氷河上で採集された隕石もこの間に落下したものと推定されます。隕石が地球に落下する際、それは定常的に落ちてくるのか、ある時期に集中しているのかという落下頻度の問題は、隕石研究の大きな課題の1つです。隕石の種類によっても落下頻度が違うことも考えられます。このようなテーマを研究するにあたって1.6万個という隕石の数は統計を考える上で大変貴重な試料数です。</p> <p>ところで、隕石が宇宙空間にあるとき、隕石に宇宙の放射線が当たり、原子核反応が起こり、極微量の放射性元素(<sup>14</sup>C,<sup>26</sup>Al,<sup>36</sup>Cl,等)が生じます。隕石が地上に落下すると宇宙の放射線が当たらなくなるので、宇宙空間にあった時に生じた放射性元素は時間と共に減少します。放射性元素の減少の仕方は核種によって特有ですので、残っている放射能(放射線強度)を測定することにより落下年代を求めることができます。</p> <p>本研究では、宇宙線研究所の地下25mにある微弱放射能測定設備を利用して、南極隕石に生じた<sup>26</sup>Alから放出される微弱なγ線強度を測定しています。</p> <p><sup>26</sup>Alから放出されるγ線は大変微弱なため、1試料の測定に数ヶ月を必要とします。小指の先程しかない少量の南極隕石については、隕石を非破壊で測定できる本設備で測定する方法がベストであると考えられますが、1万を超える数の隕石を取り扱うには時間がかかり過ぎます。大きな隕石については隕石を溶かしてしまっても<sup>26</sup>Al量を測る方法(加速器質量分析法; AMS法)があります。</p> <p>平成19年度までに測定された南極隕石のうち、過去に鋸山の低バックグラウンドγ線測定設備で測定した3個の隕石試料の値がAMS法による値に比べ、倍ほど高くなっていました。平成20年度は3個のうちY-86770(炭素質コンドライト)について柏の微弱放射能測定設備でγ線を再測定しました。AMS法による測定値と柏での測定値は誤差範囲内で一致しました。よって、鋸山のデータが間違っていたこととなります。これは鋸山の設備が高湿度のトンネル内であったため設備の安定した管理が困難であったことによると考えられます。</p>
整理番号	